



処理を考える(19)

処理が「お節介?」になっていないか

盲人情報文化センターではスタジオ製作で常時100冊あまりの音声訳(年間では250冊程度)を手がけています。校正は4校まで実施していますので1冊の本に対して5人が関わることとなります。

多くの方が音声訳の作業に関わることから「処理」についてもいろいろな意見がでてきます。処理の原則は「聞き手に原文をより正しく伝える作業」と考えていますが、その方法は人によってそれぞれ少しずつ違ってきます。校正表にはこうした処理についての意見がいろいろ挙げられますが、最終的にはどちらにするかは職員が判断することになっています。しかし、方法にはいろいろあっても処理についての考え方が少しずつ変わっているとその処理自体がおかしくなってきます。

さて、最近気になる処理にいくつか出会いました。

「原文をより正しく伝える」といっても、これが意外と音声訳者によって様々に解釈さ、れいろいろな問題を引き起こすようです。

例えば「分かるように読む」ということから、ある人は「少し難しいことばが出てくるとやさしいことばに置き換えたり、わかりにくいから勝手に文章を変えてしまったり、英文がでてくると日本語に訳したり」といったケースです。これは処理の考え方がずれてきていることから出ているようです。

私たちが難しい言葉や知らない言葉が出てくれば当然文章の意味が分からないこともあるわけですが、これを「音声訳とは分かるように読むことだから」といろいろと「お節介」をするのが処理と思っているようです。「難しい文章」ということも含めて正しく伝える作業が音声訳なのですが、これを難しいから教えようとしたりすると音声訳ではなく「解説書?」作りになってしまいます。しかし、時々こうした間違った処理を音声訳の仕事と思い込んでいる人もいます。

「原文をより正しく伝えること」は「難しい、あるいは分かりにくい原文を、わかりやすくして読むこと」ではないことを押さえて欲しいものです。

今月の練習問題

『お言葉ですが・・・』高島俊男著

こうづけさん、お久しぶり

いつも悪口ばかり言っているから、たまにはうれしい御報告をいたしましょう。
毎週日曜の産経新聞、「晩年の生きよう」というコラムがある。歴史上の著名人物の晩年を書いたもので、筆者は編集委員の牧野弘道さん。

その「新井白石」の条にこうあった。

<白石の先祖は元々は上野国(群馬県)の源氏の武士で、戦国の世を流れ流れて祖父の代には常陸国(茨城県)下妻に移り住んだ。>

うれしいのは、この「こうづけ」というふりがななんだ。

お久しぶり、「こうづけ」さん!

というのが、いま日本では、新聞も雑誌も本も、すべて「上野」のかな書きは「こうづけ」なのである。たとえば、「吉良上野介」は「きらこうづけのすけ」。

これは、国語辞典がみなそうしているからである。

でもねえ、「下野」が「つけ」で、「上野」が「ずけ」とは変だなあと、誰も思わないのかしら。だいたい「ずけ」なんて、見るからにきたないじゃないか。

……と思っていたら、牧野さんがあえて、あらゆる国語辞典に異を立てて「こうづけ」と書いてくださった。

牧野弘道さんに、敬礼!

ずっとずっと昔、いまの群馬・栃木両県一帯を「毛野」と言った。「草木の生いしげる野」の意味であろう。――ほかに、「むしろを作る野」とする説、「皇室に食物をたてまつる野」と考える説、などもありますが一――

その後、この毛野を二国にわけて、京都に近いほうを「上毛野」、遠いほうを「下毛野」とした。

この「つ」は、「の」の意味である。つまり、「上の毛野」と「下の毛野」だ。大化の改新のころ、国名は二文字、ということになったので、「毛」を除いて「上野」「下野」と書くこととした。ただし読みは従来通りで「かみつけの」と「しもつけの」。

なお、「毛」は完全に消えうせたわけではない。いまでもJRに両毛線りょうもうせんがある。また群馬県には上毛新聞じょうもうしんぶんという新聞があるよし。

もとにもどって――

そのうちにだんだん、「かみつけの」「しもつけの」のおしまいの「の」が発音されなくなって、「かみつけ」「しもつけ」と言われるようになった。

さらに、「かみ」がなまって「こう」になった。これは、たとえば「神々しい」を「こうごうしい」と言うのと同じ発音変化ですね。

「こう」になると、その下は濁るほうがなめらかなだから「こうづけ」になった、——という諸段階をへて、現在、「上野」と書いて「こうづけ」、「下野」と書いて「しもつけ」、ということになっているのである。

すべての国語辞典が「こうづけ」と書くのは、現に「ず」と発音しているんだから「ず」でよい、という考えなのであろうが、それは乱暴というものだ。ならば「三日月」は「みかずき」に、「千羽鶴」は「せんばずる」になってしまう。

それに、「こうづけ」だから、またもとの「かみつけの」へたぐってゆく手がかりがあるのである。「こうづけ」では何のことかわからない。

よく新聞のコラムなどで、『広辞苑』にこうある、と鬼の首をとったように書いている人があるが、あれは滑稽ですね。『広辞苑』に書いてあることは全部正しい、と思いきむのは、妄信というものである。

『広辞苑』にかぎらず、いまの国語辞典はみな、敗戦直後におこなわれた「国語改革」を支持する立場で作られている。

その国語改革は、戦争に負けたショックから、根本的に、「これまでの日本はまちがっていたのだから、過去の日本とはすっぱり縁を切って、アメリカのような科学的文化国家を新規に作ってゆこう」という考えのもとにおこなわれた戦後諸改革の一つである。そこでは「これからの日本語」という一側面のみが考慮され、昔の人たちと対話する、というもう一方の大切な側面はほとんどかえりみられることがなかった。

その後数十年、「アメリカのような科学的文化国家を作る」という目標は、当初の予想とくらべるとわりあい容易に、ほぼ達成できた。

達成してみると、それはたしかに便利で快適ではあるが存外うすっぺらなものであって、人々はそれだけではものたりない。昔の日本人と対話したくなる。そうすると、「過去とはすっぱり縁を切ろう」という国語改革もふくめた戦後の諸変革が、こんどは昔の人との対話をさまたげる壁になってきているのである。

「こうづけ」はそのあらわれの一つだ。そして牧野さんの「こうづけ」は、その壁に小さな風穴をあけてやろうというところみなのである。

ことばのことにかきらず、最近よく目にする「景観問題」などもそうである。

敗戦後の「アメリカのような国に」という理想からすれば、リっぱなビルがどんどん建つのがいいにきまっているのである。しかし実は、すこし金ができればビルなんぞはいくらでも建つのだ。

それよりも、家並のむこうに東山連峰が見えるほうがいい。昔の人のように、毎日東山を見てくらしたい、ビルはじゃまだ、というのが、景観問題なのである。

国語改革とそれにもとづく今の国語辞典は、縁側から東山を眺めつつ昔の人たちと語りあおうとするのをじゃまするアメリカ式のビルだ、と考えたほうが実情に近いのである。

ところで——

産経新聞にももちろん校閲部はあるはずだが、なぜ牧野さんの「こうづけ」が通ったのだろう。最近の産経新聞を見ていると、外部の寄稿者の署名入りの文章に関しては、極力その人が正しい(もしくは好ましい)と考える表現を尊重しているようすがう

かがわれる。

たとえば「正論」欄の「円と日本文化の深い関わり」と題する曖村明さんの文章には、「中心には釋迦が鎮座し」「また禪においても」などの文字があった。ほかの新聞なら、問題なく「釈迦が鎮座し」「禪においても」に変えてしまうところだ。

それが、外部の寄稿者のみならず、内部の者であっても、署名して発表する文章のばあいはその表現を尊重するようになってきているのか。それとも、牧野さんはこの、すべての国語辞典が認めない「こうづけ」を通すために、校閲部相手に大闘争をやったのだろうか。

ちょっとうかがってみたい気がします。

(93・6・15)

前回の処理の例

そしてすべての川は海へ 20世紀ユダヤ人の肖像

エリ・ヴィーゼル著 村上光彦訳

わたしはカミュの全作品（彼はなぜドイツの検閲に従ったのか、そして『シシュポスの神話』からカフカについての章を省くことに同意したのか）を、サルトルの全作品（彼は『出口なし』の上演を解放後まで待つわけにいなかったのだろうか）を読んだ。

処理1 カッコ、カッコトジを読み込む

処理2 カッコ、カッコトジを読み込み、それぞれカッコの前に戻る。

例 わたしはカミュの全作品（<カッコ>彼はなぜドイツの検閲に従ったのか、そして『シシュポスの神話』からカフカについての章を省くことに同意したのか）<カッコトジ、カミュの全作品>を、サルトルの全作品（<カッコ>彼は『出口なし』の上演を解放後まで待つわけにいなかったのだろうか）<カッコトジ、サルトルの全作品>を読んだ。彼らの絶交はわたしを金縛りにした。

処理3 それぞれカッコ、カッコトジを読み込み、私はカミュの全作品をまで戻る。

例 わたしはカミュの全作品（<カッコ>彼はなぜドイツの検閲に従ったのか、そして『シシュポスの神話』からカフカについての章を省くことに同意したのか）<カッコトジ>を、サルトルの全作品（<カッコ>彼は『出口なし』の上演を解放後まで待つわけにいなかったのだろうか）<カッコトジ、私はカミュの全作品を、サルトルの全作品>を読んだ。彼らの絶交はわたしを金縛りにした。

より好ましいのはなんだろうか。行動だろうか、それとも瞑想だろうか。（『タルムード』のなかで、わが<賢者>たちは同じ問いを發した。彼らの答え。――研究のほうが価値が高い、なぜならそれは行動を誘い出すから。）

処理1 カッコ、カッコトジを読み込む

処理2 カッコ無しでそのまま読む

わたしはのちに一九五五年にジュネーヴでジヴォンと再会することとなる。首脳会談が開かれて、ソ連のジューコフおよびブルガーニン元帥（勲章をべたべた吊していた）、英首相アンソニー・イーデン（ほかの首脳たちよりも優雅だった）、仏首相エドガール・フォール（一団中、群を抜いて知的だった）、それにアイゼンハワー（この会議の父親とはいわぬまでも一種の名付け親だった）が集まったときのことだ。

処理1 カッコの前後に間を取り、カッコ内を調子を変えて（ピッチを下げて）読む。

わたしが<老人>にした口利きが実を結んだ。彼はアモスにたいする拒否権を取り下げた。彼は新聞社内です世することとなるが、もっとも署名記事は書かせてもらえなかった。彼の時評は相手を傷つければ傷つけるだけ独創性を発揮した。『イエディオト・アハロト』紙では、彼は中国料理、政治的（ほかの種類のもあったが）ポルノグラフィ、友人たち（彼を恐れている）の偉大さや敵ども（大勢いた）の馬鹿さ加減、指導者たちの野心、彼らにたいする評判者側の欲求不満などについて、人気のある記事を書くこととなった。

処理1 政治的ポルノグラフィは一つの言葉なので、ここのカッコは戻る。他は間と読み方で処理

二通りの読みがあって意味が異なるもの (48)

小節	コフシ 民謡、歌謡曲などでの微妙な節回し。 ショウケツ 小さい節。楽譜の縦線と横線とで区分された部分。	目細し	マガワシ 見た目に美しい。 メリシ 眼が細い。
諸点	ショテン 多くのいろいろな問題点。 モテン 歌の評点で左右の肩に打つ点。	八巻	ハチカ ヤマキ 八つの巻物すなわち法華経。
野合	ノアイ 戦いで両軍が平地で出会うこと。男女が婚儀を経ずに通ずること。 ヤウウ 密かに結びつくこと。	一途	イツト 一筋の道。一つの方角。「発展の一をたどる」 イツズ 一つのことだけに打ち込むこと。「一に思いこむ」

『言葉に關する問答集』文化庁編より

「競売」は「キョウバイ」か「ケイバイ」か

(答) 多くの買い手に値を付けてもらい、最も高い値を付けた者に売ることを、「競売」と書き表している。問題は、この語を「キョウバイ」と読むか「ケイバイ」と読むかということである。

この場合、「競」の字音は呉音「キョウ」、漢音「ケイ」である。これを「キョウ」と読む語には「競泳・競演・競技・競合・競走・競争・競艇・競歩」などいろいろあるが、「ケイ」と読むのは「競馬・競輪」ぐらいのものである。このように見えてくると、「競」については「キョウ」と読む語のほうが多く、「競売」も一般には「キョウバイ」と読まれているが、その点では特に問題がない。

ところが、この語を法律用語関係の辞典で調べると、「きょうばい」のところは「けいばいを見よ」となっている。そうして、「けいばい」のところには「競売」という漢字表現が掲げられていて、民事訴訟法(明治二十三年 法律第二十九号)の競売と、競売法(明治三十一年 法律第十五号)の競売について解説されている。

民事訴訟法の競売というのは、同法五百七十二条に差押物の競売の条文があり、以下、競売日時、競売の場所、競売の実施、再競売、競売の限度、などの条文が続いている。また、競売法というのは単行法で、通則のほか、動産の競売、不動産の競売、船舶の競売などの章から成り、民法・商法等の規定によって換価を認められた物件の売却についての詳細を取り決めたものである。これらはいずれも公の機関が行う公売であり、この種の「競売」について、法令関係では「ケイバイ」という読み方が行われている。

しかし、競売という売却の仕方そのものは、何も法令によるこの種の公売に限らないのであり、民間でも行われている。その場合には古くから「キョウバイ」という読み方が用いられ、現在に及んでいる。したがって、「競売」という語については、一般用語としては「キョウバイ」、法令用語としては「ケイバイ」という読み分けが行われていると考えなければならぬ。

なお、「競」の読み方に関連して、特に「ケイ」という読みを持つ「競馬・競輪」について取り上げると、次のようになる。まず「競馬」であるが、これは古くから各地で行われていた「クラベウマ」が「競馬」と書かれていたのを音読したものである。その場合に漢語らしく漢音を用いて「ケイバ」と読まれたわけである。これが法律で取り上げられて旧

競馬法(大正十二年 法律第四十七号)が制定されたとき、それも「ケイバホウ」と読まれたのは、「競売」などとの関連から考えても、当然のことである。

ところで、後に自転車競技法(昭和二十三年 法律第二百九号)というのが制定された。そのとき、自転車競技という名称が長過ぎて親しみにくいため、俗称として、競馬に合わせて競輪という語が用いられた。これを、競馬を合わせて「ケイリン」としたのも当然のことである。しかし、その後にモーターボート競争法(昭和二十六年 法律第二百四十二号)が制定されたときは、事情が異なっていた。このほうは親しみやすい俗称として「競艇」という語を用いることになったが、その読み方は「モーターボート競争法」の「キョウソウ」に合わせ、「キョウテイ」と呼ぶことに統一されたとのことである。

このように見えてくると、それぞれの語にはそのように読まれる特殊の事情が見られるのであり、理論だけで押すことはできないのである。

「素振り」は「すぶり」か「そぶり」か

(答) 「素振り」と書き表したものを「スプリ」を読むか「ソプリ」と読むかということである。

この場合、「素」という漢字の読み方は、呉音が「ス」、漢音が「ソ」である。したがって、「素振り」については、「スプリ」とも「ソプリ」とも読むことが可能である。まず、「素」を「ス」と読む場合を挙げてみると、次のようになる。

素足 素顔 素手 素肌 素焼き 素うどん
これらはいずれも訓読の語との複合である。したがって、同じように、「振り」という訓読の語との複合において「スプリ」と読むのも、極めて自然な読み方である。

ところで、このような場合に用いる「ス」というのは、「そのまま・何も持たない・他の要素が加わらない・ありのままのようす・そのままであること」などの意味を持っている。したがって、「素振り」を「スプリ」と読む場合も、そのような形でバットや木刀を振ることである。その点で、練習のために行うこの種の「振り」(実際にするように振ること)が、「スプリ」と呼ばれ、「素振り」と書かれるわけである。

これに対し、「素」を「ソ」と読む場合は、一般には次のように、音読の熟語の場合である。

素案 素因 素描 素養 素粒子



簡素 元素 平素 要素 葉緑素
しかし、中には、次のような訓読の語との複合も見られないことはない。

素知らぬ顔 素っ気ない 素首落とし
したがって、「素振り」について「ソプリ」という読み方も成り立つことになる。それは「表情や態度・動作に表れた様子」という意味で次のように用いる場合である。

変な素振りを見せる。
それとなく素振りで知らせる。
あのときは素振りがおかしかった。
どうしてああいう素振りをするのか。
この場合の「ぶり」は、「身振り」「口振り」などの「ぶり」であり、「ふりをする事」である。ただし、その前に付いた「ソ」のほうは語源がよく分からないが、漢字の「素」の意味とは関係がないから、「素」を書くのは当て字である。「素振り」について、「そぶり」という仮名書きが用いられるよ

うになったのも、このためである。

なお、「スプリ」と「ソプリ」の書き表し方について、日本新聞協会の新聞用語懇談会がまとめた『新聞用語集』を見ると、次のようになっている。

すぶり → 素振り
そぶり（素振り）→ そぶり

この示し方は、「スプリ」と読むときには「素振り」と書き、「ソプリ」と読むときには「そぶり」と書くということである。

したがって、新聞に出てくる「素振り」については、これを「スプリ」と読むべきである。しかし、一般には、旧来の書き表し方により、「ソプリ」を「素振り」と書くことも行われている。したがって、「素振り」そのものについては、前後の関係から意味を考えて、「スプリ」「ソプリ」を読み分ける配慮が必要である。

きれいに録音する為に 第28回

ヘッドホーンが起こす問題

家庭録音の場合、カセットデッキをお勧めしている関係でほとんどの方がイヤホンかヘッドホーンを使われています。そのせいで、最近試聴したテープで和室で読んでいるのに、洋間で読んでいるように反響しているものが3, 4件ありました。新人の方ばかりでなくベテランの方にもありました。録音した人に録音状況をよくよく聞いていくと、どうもその原因が、ヘッドホーン（イヤホン）ではないかということになり、次から、ヘッドホーンの音を絞って（小さくして）録音してもらったところ全員、反響音（音が響いて聞こえる症状）がなくなりました。

つまりヘッドホーンの音が大きいと、そこから漏れる声をマイクが拾ってしまうので、音が響いていたわけです。

こうしたケースがベテランの方にもみられることは意外と知られていないようなので、再度、取り上げました。これを防ぐには、ヘッドホーンの音を小さくするしかありません。カセットデッキに音量を調整するつまみがあるものもありますが、ない場合、ヘッドホーン（イヤホン）にボリュームを調整する機能が付いているものを購入します。

録音中はヘッドホーンの再生音がマイクに拾われないように、できる限り最小のボリュームにしましょう。

利用者から製作依頼を受けている原本

以下のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。初めてのグループの方は何か5分でも結構ですから録音したものをご持参下さい。録音状態をチェックさせていただいてから録音にかかっています。

書名	<分類>
『目で見るとリハビリテーション医学』	<医学> A4版110頁
『スウェーデンの経済 福祉国家の政治経済学』	<社会科学> B5版 182頁
『キリスト教の弁証』	<宗教> B4版 200頁
『地球への求愛』	<自然科学> B4版188頁
『エコシステム農法の奇跡 微生物が日本の大地を救う』	<農業> B4版 210頁
『気で治る本 日本の[気の医療]最前線』	<医学> B4版 248頁
『ヨセフとその兄弟 II』	<宗教> B4版 620頁
『ヨセフとその兄弟 III』	<宗教> B4版 562頁

今回引き受けて頂いた原本とグループ	
『チャイナマン』田中昌太郎 著 <小説>	テープライブラリーにしのみや
『灯2月号』『灯3月号』 <俳句> B4版 各41頁	''
『死因』 <小説>	''
『健康売りますイギリスのニセ医者のお話』 <医学>	えくてもあ
『宣教 第20号』 <宗教>	